

印旛沼周辺の終末期古墳

永 沼 律 朗

はじめに

1. 印旛沼周辺の終末期古墳

2. 方墳と古代寺院

結 語

論文要旨

本稿の目的は、成東町駄ノ塚古墳に関連して、印旛沼周辺の終末期古墳の様相を明らかにすることにある。そのため、基本的に印旛沼周辺の終末期古墳の紹介に主眼を置いた。

結論としては、この地域の終末期古墳は方墳が多いこと。埋葬施設の石材に、貝化石を含む砂岩が使用されている古墳があることを指摘した。方墳の中でこの種の石材を使用している横穴式石室は、石材を横置きに使用し側壁を持ち送りで構築する点や床に間仕切りを有するといった点にも共通点があり、一つのグループとしてとらえることができると考える。その地域は広く見れば利根川流域から手賀沼・印旛沼周辺、狭く見れば印旛沼周辺の一部と推測する。

房総半島全体をみても終末期の方墳は多い。方墳は石室の特徴から印旛沼周辺のグループを含め二つのグループと一つの特異な地域に分けることが可能であり、その中の大型方墳が盟主墳的な存在であろうと考える。また、それらの古墳被葬者の系譜下で、房総半島では初めて古代寺院の建立が行なわれたであろうとも推測した。

はじめに

印旛沼の周辺には多くの古墳が分布している。その中で、柴町龍角寺古墳群や成田市公津原古墳群についてはしばしば検討されているが、最近発掘資料がますます増えつつあるので、筆者なりに沼周辺の古墳を考えてみたい。本稿の目的は、成東町駄ノ塚古墳に関連して、印旛沼周辺の終末期古墳の様相を明らかにすることにある。そのため、基本的に図1内の終末期の古墳に限定して検討する。

印旛沼周辺の古墳時代終末期に属する古墳は、沼の北東方に広がる龍角寺古墳群⁽²⁾と沼の東方に点在する公津原古墳群⁽³⁾中に多く所在する。また、龍角寺古墳群南方の成田市上福田古墳群にも終末期の方墳が存在する⁽⁴⁾。他に沼の北西方、利根川に近い印西町を中心とした地域には、龍角寺古墳群にも見られる貝化石を含む砂岩を埋葬施設に使用している古墳が集中している⁽⁵⁾。これらの古墳の他にも図1の範囲の中には、多くの終末期古墳が所在すると思われるが、主に上記の古墳を中心に本地域の特徴を検討していく。

また、この地域には、大和山田寺の瓦の意匠文様に似た軒先瓦を採用している古代寺院が4ヶ寺所在する⁽⁶⁾。そのうち龍角寺と龍角寺古墳群については、先学により検討されている⁽⁷⁾。最近では、房総半島に多く見られる方墳と山田寺系の瓦当文様を採用した古代寺院を、蘇我氏と結びつけて理解しようとする考えも提示されている⁽⁸⁾。

本稿ではこれら先学の考えを軸に、この地域の特徴である貝化石を含む砂岩を使用した埋葬施設等も考慮に入れ検討してみたい。また、基本的に筆者の目的は、印旛沼周辺の終末期古墳の様相を明らかにすることにあるが、房総半島に多く分布する終末期方墳とそれらに近接している初期古代寺院がどのような結び付きにあるかも一瞥してみたいと思う。

1. 印旛沼周辺の終末期古墳

筆者は終末期古墳を、前方後円墳が築造されなくなっからの古墳と考えていることを、はじめにことわっておく。それにしても、最後の前方後円墳及びその年代さえも不明確な現状においては、終末期古墳を確実にとらえることは困難である。そこで、今回は新しい古墳からしばしば出土する須恵器のフラスコ形長頸瓶ないし低い高台付長頸瓶か、それらと同時期の土器を出土する古墳、また横穴式石室か箱式石棺を埋葬施設に採用した古墳等を取り上げて検討する。

- =貝化石を含む砂岩を使用した方墳
- =貝化石を含む砂岩を使用した円墳
- ▲=貝化石を含む砂岩を使用した古墳であるが墳形不明
- =砂岩及び片岩を使用した方墳
- =砂岩及び片岩を使用した円墳と前方後円墳
- △=砂岩及び片岩を使用した古墳であるが墳形不明
- ◎=古代寺院

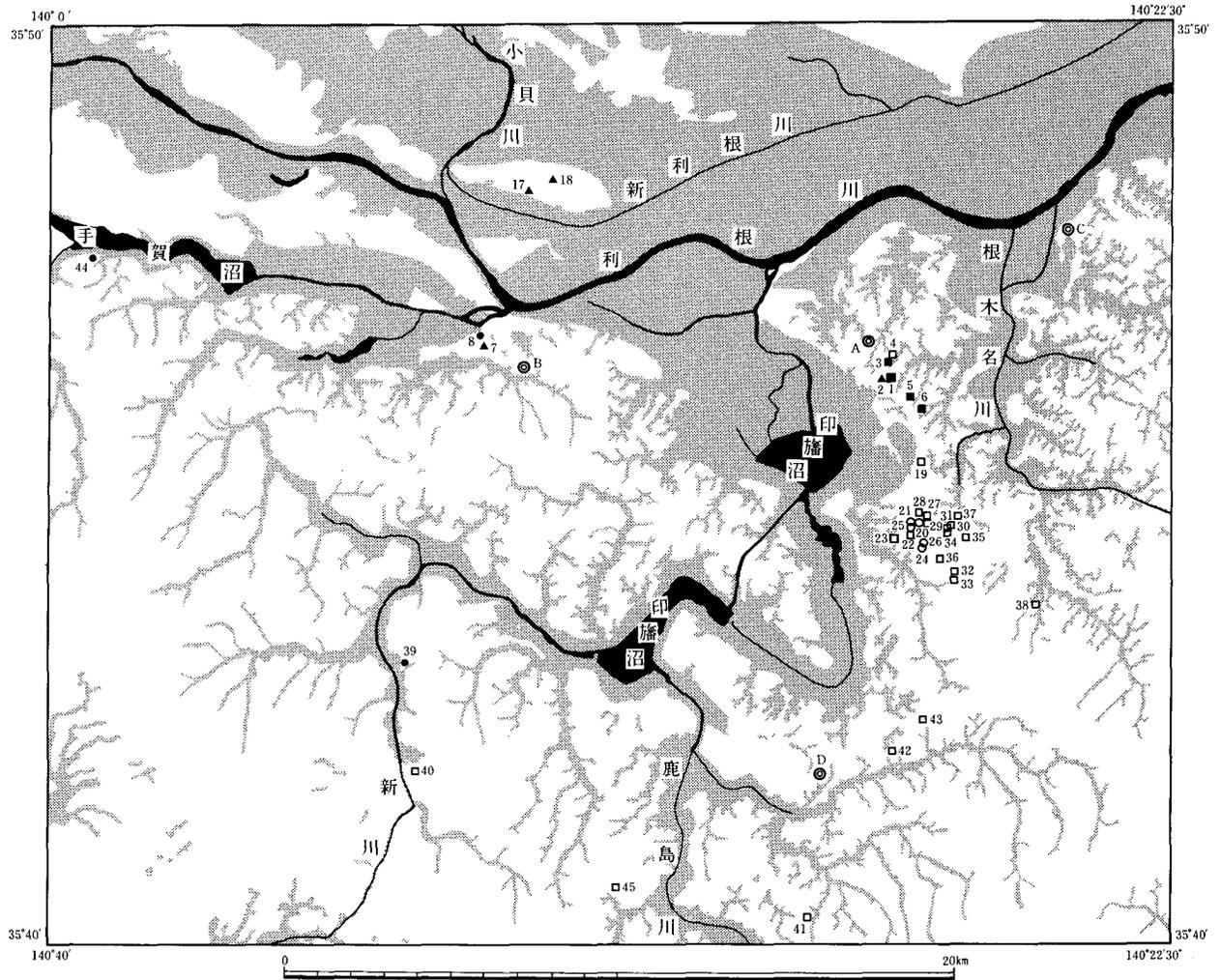


図1 印旛沼周辺の終末期古墳及び古代寺院位置図

表1 印旛沼周辺の終末期古墳地名表

図1	古墳・寺院名	所在地	墳形規模	埋葬施設	出土遺物	文献	
1	龍角寺岩屋古墳	栄町龍角寺	方墳(80×79)	貝砂岩 単室	横穴式石室	須恵器・鉄鏃・直刀	註11
2	龍角寺K104号墳	栄町龍角寺	方墳(30・35×30) 方墳(17×17—21×不明)	貝砂岩 単室	横穴式石室		〃13
3	みそ岩屋古墳	栄町龍角寺		貝砂岩 単室	横穴式石室		〃14
4	龍角寺K108号墳	栄町龍角寺		片岩 単室	箱形横穴式石室		〃15
5	上福田岩屋古墳	成田市上福田	方墳(32×32)	貝砂岩 単室	横穴式石室	須恵器・土師器	〃18
6	上福田13号墳	成田市上福田	方墳(18×18—36×31)	貝砂岩 単室	横穴式石室		〃20
7	上宿古墳	印西町大森	前方後円墳	貝砂岩 単室	横穴式石室		〃22
8	後庵山2号墳	印西町大森		貝砂岩 単室	横穴式石室		〃23
9	森内古墳	印西町大森		貝砂岩	箱式石棺		〃5
10	大森古墳	印西町大森					〃5
11	寺脇古墳	印西町竹袋					〃5
12	井之内内作古墳	印西町竹袋					〃5
13	宮田古墳	印西町浦部					〃5
14	道作口古墳	印西町小林					〃5
15	鳥見神社古墳	白井町平塚		貝砂岩	箱式石棺		〃5
16	海老内台古墳	白井町海老内台			箱式石棺?		〃5
17	城の台3号墳	利根町押戸		貝砂岩	箱式石棺		〃25
18	横須賀台古墳	利根町横須賀墓		貝砂岩	箱式石棺		〃25
19	八代台20号墳	成田市玉造	方墳(15×10—17×12)	片岩	箱式石棺	須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・鏡・刀・轡	〃4
20	天王・船塚4号墳	成田市赤坂	前方後円墳(18—32.5)	砂岩 単室	横穴式石室		〃3
21	天王・船塚8号墳	成田市赤坂	前方後円墳(29.5—34)	片・砂岩	箱式石棺	須恵器・鉄鏃・刀子・玉	〃3
22	天王・船塚10号墳	成田市台方	方墳(18.5×18—21.5×21)	砂岩 単室	横穴式石室	須恵器・直刀	〃3
23	伝伊都許利命墓古墳	成田市	方墳(35×36)	砂岩 単室	横穴式石室		〃32
24	天王・船塚34号墳	成田市	円墳(19×20.5—21×23.5)	砂岩 単室	横穴式石室	須恵器・鉄鏃・刀子・直刀	〃3
25	天王・船塚37号墳	成田市	円墳(21×24)	砂岩 単室	横穴式石室	須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・刀子・滑石	〃3

26	天王・船塚40号墳	成田市	円墳(不明)	砂岩	単室	横穴式石室	鉄鏃・玉類	註 3
27	天王・船塚44号墳	成田市山口	方墳(16.5×17—19×19.5)	砂岩	単室	横穴式石室		// 3
28	天王・船塚48号墳	成田市	方墳(11.5×14.5—15×17.5)	片岩		箱式石棺	土師器・鉄鏃・帯金具	// 3
29	天王・船塚50号墳	成田市	方墳(20×19.5—23×24)	砂岩	単室	横穴式石室	須恵器・轆	// 3
30	瓢塚27号墳	成田市米野向台	方墳(27・23×20—29・26×23)	砂岩	複室	横穴式石室	須恵器・鉄鏃	// 3
31	瓢塚36号墳	成田市米野向台	方墳(11.5×12—13.5×15)	砂岩	単室	横穴式石室	須恵器	// 3
32	瓢塚38号墳	成田市江弁須	方墳(不明・不明—22・29)	砂岩	単室	横穴式石室	須恵器・耳環	// 3
33	瓢塚39号墳	成田市江弁須	方墳(25×25—29×29)	砂岩	複室	横穴式石室	土師器・鞍・鏝・刀子	// 3
34	瓢塚40号墳	成田市米野向台	方墳(15.5×12—18×14)	片岩		箱式石棺	直刀・柄頭・鉄鏃・帯金具・金糸	// 3
35	瓢塚41号墳	成田市郷部	方墳(15・13×17—18・17×20)	片岩		箱形横穴式石室	直刀・鉄鏃・轆	// 3
36	瓢塚42号墳	成田市橋賀台	方墳(15×13.5—20.5×18)	砂岩	単室	横穴式石室	須恵器	// 3
37	瓢塚44号墳	成田市郷部	方墳(11×12—14×15)	片岩		箱形横穴式石室?		// 3
38	松ノ木台2号墳	富里町日吉倉	方墳(17×18—21.5×20.5・22)	砂岩	単室			// 49
39	沖塚古墳	八千代市村上	円墳(25×29)	貝砂岩	単室	横穴式石室	須恵器・土師器・人骨数体	// 56
40	村上1号墳	八千代市村上	方墳(18.5・16×24—21・19×27)	砂岩	複室	横穴式石室		// 59
41	松向作9号墳	佐倉市岩富	方墳	片岩	単室	箱形横穴式石室	須恵器・玉類	// 52
42	墨小盛田古墳	酒々井町墨	方墳(30.3×23.3—36.4×28.3)	片岩	単室	箱形横穴式石室	須恵器	// 54
43	尾上平台1号墳	酒々井町尾上	方墳(30×30)?	片岩		箱式石棺		// 55
44	船戸1号墳	沼南町大井		貝砂岩				// 56
45	御山遺跡047遺溝	四街道市物井	方墳(9.5×9.5—12.5×不明)	片岩		箱形横穴式石室		// 60
A	龍角寺	栄町龍角寺						// 80
B	木下廃寺	印西町木下						// 84
C	龍正院	下総町滑川						// 85
D	長熊廃寺	佐倉市長熊						// 88

(古墳の規模は、調査が行われていない場合は見かけの墳丘、調査が行われている場合は前が周溝内側下端、後が周溝の外側での数値である。また、00・00と数字が併記されているものは、向かい合う辺の長さが明らかに違うものである。単位はm。)

(1) 古墳の紹介

龍角寺古墳群

龍角寺古墳群⁽¹⁰⁾は、印旛沼北東の台地上に位置し120基以上の古墳から構成されている。これらの古墳の多くは、発掘例が少なく断定はできないが、おそらく古墳時代の後期から終末期にかけて築造されたと思われる。そのなかに、龍角寺岩屋古墳(K105号墳)、みそ岩屋古墳(K106号墳)、龍角寺K104(旧57)号墳、龍角寺K108号墳の4基の終末期方墳が確認されている。その他にも終末期の古墳があると思われるが、発掘調査等で確認はされていない。

龍角寺岩屋古墳(K105号墳)⁽¹¹⁾は、三段築成の整った方墳で、終末期の方墳としては全国一の規模をもつ。周溝の発掘調査は行なわれてないが、測量図から見るかぎり古墳を全周するような二重周溝の形態は取らないかもしれない。石室前面に平坦面がありそうなことは、後述の上福田13号墳でも確認されている。石室は古くから開口しており、出土遺物は知られていない。石室は南側に2基並んでおり、東側の方が若干大きいがほぼ同様の作りである。石材は、貝化石を含む砂岩を使用し、玄室外で数枚片岩を使用している。羨道部の存在は不明である。⁽¹²⁾

龍角寺K104(旧57号墳)⁽¹³⁾は、かつて石室内の発掘調査が行なわれ、土器・鉄器等が出土して

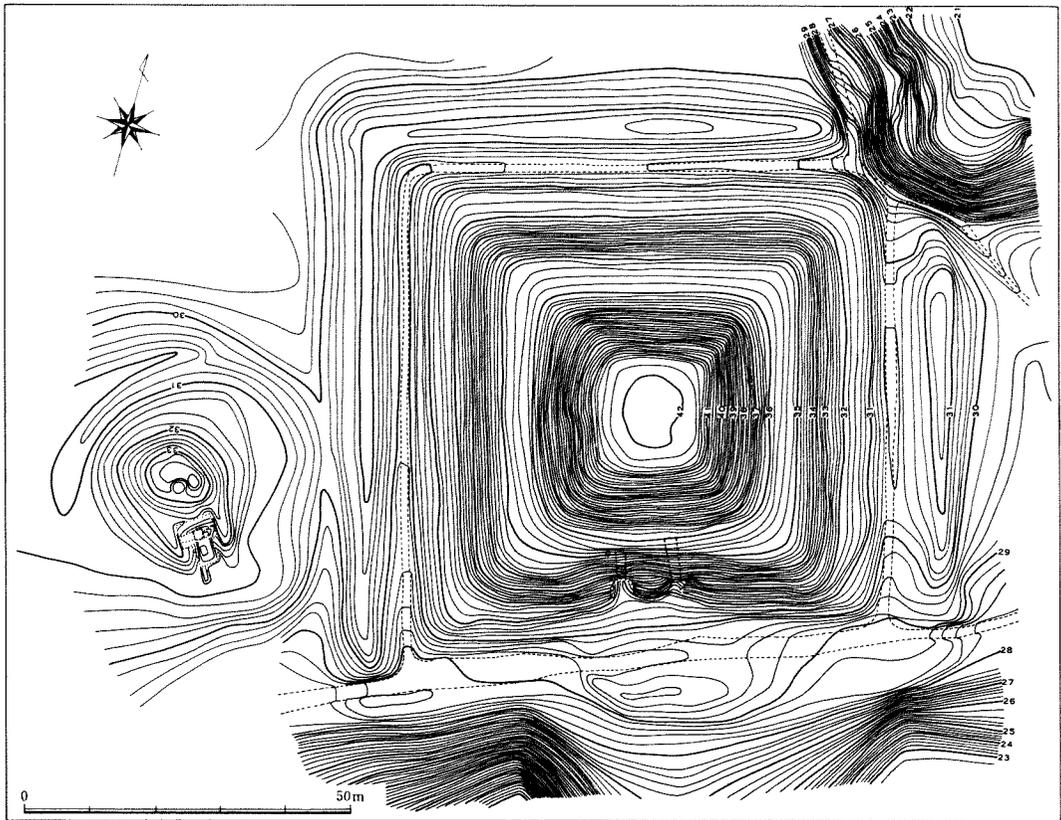


図2 龍角寺岩屋古墳と龍角寺K104号墳墳丘測量図(註2の文献より作成)

いるが詳細は不明である。古墳は岩屋古墳の西側に位置しており、岩屋古墳の周溝が二重であるならば接しているかもしれない。また墳丘は、測量図から円墳に見えるが断定はできないであろう。石室は貝化石を含む砂岩で構築されているが、岩屋古墳と形態がまるで違い、平面プランは正方形に近く非常に小さい。また、石室の軸方向も岩屋古墳とは異なる。

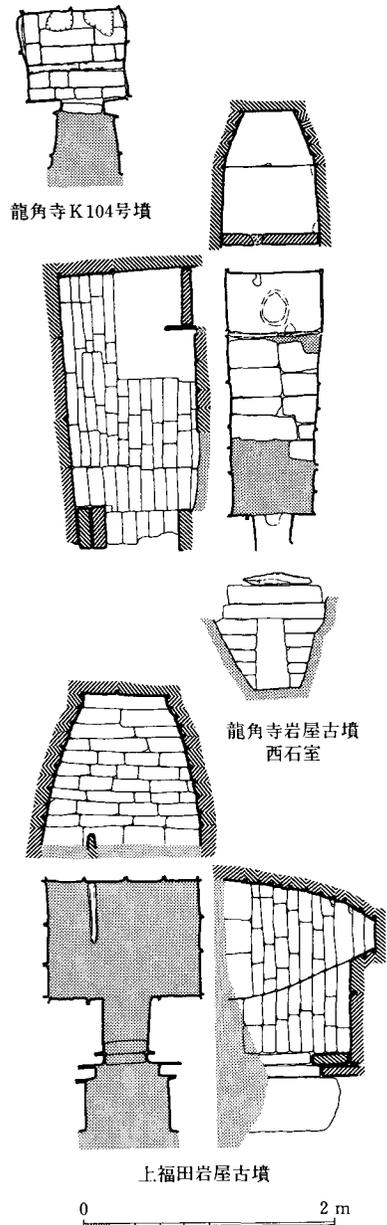
みそ岩屋古墳（K 104号墳）⁽¹⁴⁾は、岩屋古墳の北方に位置し墳丘は低い。測量図から見ると墳形は逆台形に見えるが、周溝の発掘調査が行なわれていないので何とも言えないが、円墳ではないと思われる。石室内の清掃が行なわれているが、出土遺物はない。石室は、貝化石を含む砂岩で構築されており、プランは羽子板状を呈している。側壁は持ち送りで積み上げられ、床には間仕切り石が2か所あったと思われる。羨道部の側壁は、板石を立てたものである。

龍角寺 108号墳は、みそ岩屋古墳のさらに北方で調査された方墳である。周溝は一重だけで、石室は片岩を使用した箱式石棺に、周溝にむかってへの字状に開く羨道部が付けられた特異な形態の横穴式石室である。しかも、羨道の左右の石材に一枚ずつ、貝化石を含む砂岩が用いられている。遺物は、八窓透かしの鍔が付く直刀が周溝内から出土し、その他にも鉄鏃と高台付長頸壺が出土している。土器は盗難に遭い、細かい検討はできない。

上福田古墳群

上福田古墳群⁽¹⁶⁾は、龍角寺古墳群の南方に広がり10数基の古墳で構成されている。そのうち前方後円墳と円墳は印旛沼に面する西側に多く位置し、墳形から前期ないし中期にかけての古墳⁽¹⁷⁾と思われる。台地の東側には、石室が確認できる終末期方墳の上福田岩屋古墳と上福田13号墳があり、そのほかにも方形盛土の古墳があるが、現状では内部は不明である。

上福田岩屋古墳⁽¹⁸⁾は、小松眞一氏により特殊な石室とし



（上福田岩屋古墳の図は、工藤英行氏の実測図に小松眞一氏の図を追加し、それを筆者が加筆修整して製図したものであり、新しく実測したものではない。他は各文献より作成。アミの部分は土及び流土が堆積していることを示す。）

図3 石室集成(1)

すでに大正時代に紹介されている。⁽¹⁹⁾二段築成の方墳で周溝等は不明であるが、石室前面には平坦面がある。石室は貝化石を含む砂岩で構築されている。形からみると横穴の玄室を思わせるような形態で、石室はT字形に広がっている。床には一部間仕切り石が残る。奥壁・側壁は四面とも持ち送りで構築されており、この種の石材を使用した石室のなかでは最も高い天井を有する。小松眞一氏はその特異な形態から、朝鮮半島との関係も示唆している。出土遺物は知られていない。

上福田13号墳⁽²⁰⁾は、二重周溝を巡らす方墳である。南側斜面に面する石室開口部には周溝はなく、半月形の前庭部が広がる。石室は、みそ岩屋古墳に非常によく似た形態で、玄室の奥には間仕切り石がある。前庭部に、閉塞石として使用されたと思われる片岩が一枚だけある。前庭部石室寄りの左右から須恵器の甕・蓋・杯等が出土している。土器の製作年代は、7世紀後半から8世紀前半頃と思われる。

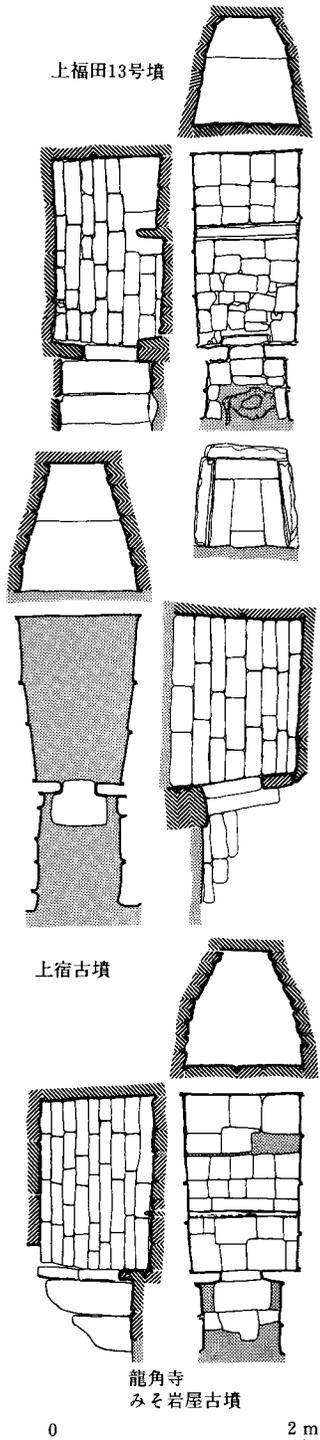
印西町の古墳

印旛沼の北西方、利根川南方の台地上にも、貝化石を含む砂岩を埋葬施設に使用した古墳が数基集中している。⁽²¹⁾墳形は円墳か方墳、埋葬施設は石室か石棺であろう。発掘調査が行なわれても墳形・石室形態など明らかになったものは少ない。

そのなかで上宿古墳⁽²²⁾は、墳形は明らかでないが、しっかりした石室が現存している。石室プランは、みそ岩屋古墳・上福田13号墳の石室に似ている。しかし、羨道部も貝化石を含む砂岩を横積みしている点が違う。板石を立てたものでないことは重要である。この古墳も発掘調査が行なわれてなく、石室も古くから開口しており副葬品などは不明である。

その他、後庵山2号墳等⁽²³⁾の古墳については、実態が明らかでない。しかし、埋葬施設の石材に、貝化石を含む砂岩を使用していることはまちがいない。

手賀沼南方の白井町にも、平塚海老内古墳・鳥見神社古墳等の貝化石を含む砂岩を埋葬施設に使用した古墳があるが、印西町の古墳同様詳細は不明である。⁽²⁴⁾



(各文献より作成。アミの部分は石材がなく土であることを示す。)

図4 石室集成(2)

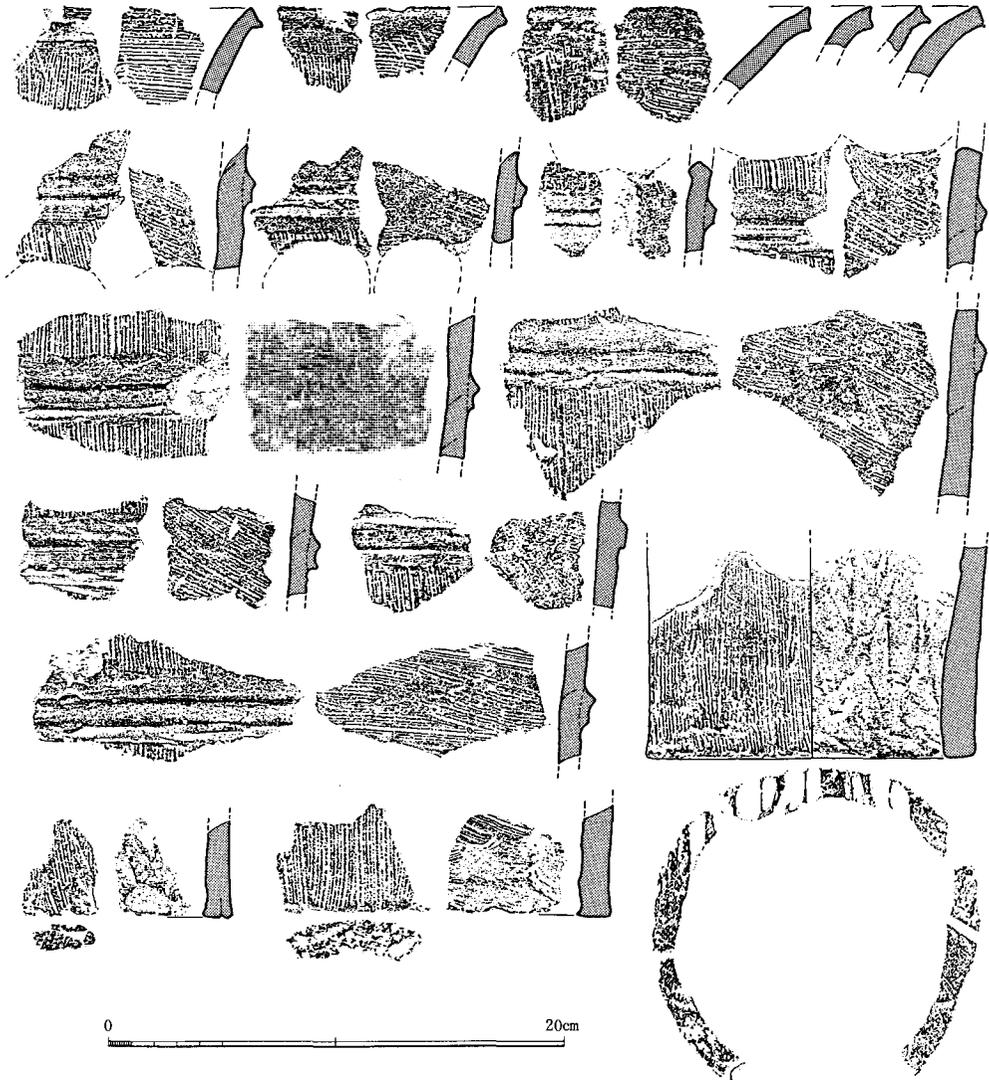


図5 船塚古墳表採埴輪

利根川北方の古墳

利根川北方で、貝化石を含む砂岩を使用した埋葬施設をもつ古墳として、横須賀台古墳・城ノ台古墳⁽²⁵⁾があるが、墳形・石室等の形態は不明である。しかし、貝化石を含む砂岩を埋葬施設の石材に使用していることは、重要と思われるので紹介しておく。

公津原古墳群

公津原古墳群⁽²⁶⁾は、印旛沼の東側・龍角寺古墳群の南方に位置し、116基以上の古墳が存在したと考えられている。この古墳群は、八代台古墳群（支群）、天王・船塚古墳群（支群）、瓢塚古墳群（支群）に大きく分けられているので、筆者もその名称に従っておく。この古墳群は、前期から連綿と造墓活動が続けられており、終末期の古墳も多数ある。また、中期の方墳や、発掘調査

の行なわれていない古墳も多数ある。公津原古墳群と先述の龍角寺古墳群は、近接して広がる古墳群であるが、大きな相違点がある。それは公津原古墳群中には、貝化石を含む砂岩を使用した埋葬施設がない。そして、方墳の多くは根木名川からのびる支谷に面するが、龍角寺・大竹・上福田古墳群の方墳とは谷筋が違うことである。以下主な古墳の紹介をする。

八代台20号墳⁽²⁷⁾は長方形の方墳で、南側の裾に長軸が周溝に平行している箱式石棺が発見されている。

天王・船塚古墳群はその名のとおりに、天王塚古墳と船塚古墳を中心とした古墳群である。天王塚古墳は全長63mの前方後円墳で、発掘調査は行なわれてない。船塚古墳は、全長85mの前方後方墳とされている。しかし、墳丘はくびれ部等も明瞭でなく、発掘調査が行なわれなければ何とも言えないと思われる。また、この古墳の年代は、『公津原』に報告されている近くの埴輪窯から出土した埴輪で決められることがあるが、表採資料を見る限り、それよりは明らかに新しいと思われるので紹介しておく⁽²⁸⁾。

天王・船塚4号墳⁽²⁹⁾は、円墳の周溝の一部を方形に張り出し、一見すると前方後円墳とも見える形を呈し、さらにその外に円形の周溝を巡らしている。石室はくびれ部中央から、前方部状の周溝に向かって開口している。使用されている石材も他に比べて大きい。これは、前方後円墳に横穴式石室が導入され、考え出された形態ではなかろうか。

天王・船塚8号墳⁽³⁰⁾は前方後円墳で、埋葬施設は側壁を砂岩で構築し天井石には片岩を使用した箱式石棺をくびれ部中央にもつ。

天王・船塚10号墳⁽³¹⁾は平行四辺形に近い方墳で、砂岩を使用した単室の横穴式石室を埋葬施設にもつ。

伝伊都許利命墳墓古墳⁽³²⁾(天王・船塚27号墳)は、古墳群から離れ単独で印旛沼に続く支谷に面して位置する。古墳群の他の方墳は、根木名川からのびる支谷に面しており、伝伊都許利命墳墓古墳は、公津原古墳群の方墳とは性格が違つかもしれない。また、埋葬施設も砂岩を使用した横穴式石室と大きな片岩の板石を使用した箱式石棺が設けられている⁽³³⁾。成田市史には、古老によると、石棺は他の地から移したものと記されており、取り扱いには慎重にしなければならない。規模も、公津原古墳群の方墳よりは一回り大きい。かつて遺物が出土しているようであるが詳細は不明である。

天王・船塚34号墳⁽³⁴⁾は、埋葬施設に砂岩で構築された横穴式石室をもつ古墳である。墳形は、石室が構築された南側が若干のびた「卵」形に近い形態になる。出土した須恵器には、フラスコ形長頸瓶もある。

天王・船塚37号墳⁽³⁵⁾は、砂岩の板石で作られた箱式石棺を埋葬施設にもつ円墳である。

天王・船塚40号墳⁽³⁶⁾は、砂岩で構築された横穴式石室をもつ円墳かと思われる。

天王・船塚44号墳⁽³⁷⁾は、埋葬施設に砂岩で構築された横穴式石室をもつ方墳である。石室の位置は、辺の中央よりも少し西による。また、石室は短い羨道部が周溝に接している。

天王・船塚48号墳⁽³⁸⁾は方墳で、墳丘中央よりも若干南によったところに片岩で造られた箱式石棺を埋葬施設として構築している。床には木炭が敷かれていた。石棺内からは人骨しか発見されず、すべての遺物は蓋石よりも上から出土したという。

天王・船塚50号墳⁽³⁹⁾は、根木名川に続く支谷の谷頭に近い斜面に位置する方墳である。埋葬施設は砂岩を積んだ単室の横穴式石室である。

瓢塚古墳群は、天王・船塚古墳群の南方で、前方後円墳の瓢塚古墳を中心とした古墳群としてとらえられている。

瓢塚27号墳⁽⁴⁰⁾は東西にのびた長方形の方墳で、埋葬施設は砂岩切り石積み、床には仕切り石があり複室構造の横穴式石室である。出土した長頸瓶の底部に「老」または「麿」⁽⁴¹⁾の墨書がある。

瓢塚36号墳⁽⁴²⁾は小規模な方墳であるが、砂岩を用いた単室の横穴式石室を埋葬施設にもつ。

瓢塚38号墳⁽⁴³⁾も、砂岩を用いた単室の横穴式石室を埋葬施設にもつ方墳である。天井石は中央に稜をもつ山形を呈していたとされている。

瓢塚39号墳⁽⁴⁴⁾は、古墳群の最東端に位置する方墳である。埋葬施設は、砂岩で構築された横穴式石室で、中央部に間仕切り石がある。壺鏡・鞍金具が出土している。また他の古墳でも見られるが、石室後方上部から長頸瓶が出土している。

瓢塚40号墳⁽⁴⁵⁾は、南辺の中央部が1mほど突出した東西に長い方墳である。埋葬施設は、片岩を使用した箱式石棺で、石棺の蓋上から方頭の柄頭を有する直刀が出土した。他に周溝から須恵器の大甕・馬鈴・帯金具が、石棺内からは金糸等も出土している。

瓢塚41号墳⁽⁴⁶⁾は南北にやや長い方墳で、埋葬施設は片岩を使用した横穴式石室であり注目される。

瓢塚42号墳⁽⁴⁷⁾は、砂岩を用いた単室の横穴式石室を埋葬施設にもつ方墳である。使用している石材は大きく、羨道部がハの字に開く。

瓢塚44号墳⁽⁴⁸⁾は、41号墳と同様な埋葬施設をもつ方墳であろうと考えられている。

その他の古墳

松ノ木台2号墳⁽⁴⁹⁾は、根木名川上流域の台地上に単独で位置する方墳である。埋葬施設は、砂岩切り石を使用した単室の横穴式石室である。石材の目地には粘土が詰められ、玄室の前には貝殻が敷かれていた。石室内からの出土遺物はないが、周溝内から径6.2cmの海獣葡萄鏡1面と刀子3本が出土している。

沖塚古墳⁽⁵⁰⁾は、印旛沼の南西に位置する円墳である。規模は、墳丘が径25m、周溝外で径30mほどである。周溝は、谷に面した南側の一部が5mほどとぎれ、いわゆるブリッジを有する。埋葬施設は横穴式石室で、周溝のとぎれた端の部分に開口するように構築されている。石室は、貝化石を含む砂岩を使用した単室の横穴式石室で、羨道も同じ石材を積んで側壁のみを造っている。石室内の石材は切り石として整えられているようであるが、羨道部の石材に整った面はなく雑な積み方ようである。石室内には、奥のほうに人骨が5・6体分集中して発見されているが、副葬品はなく盗掘にあった可能性もあるという。ブリッジ延長上の石室掘り方にかかる場所に、

据えられた状態で須恵器の甕が出土している。また、墳丘からフラスコ形長頸瓶も出土している。口縁部には段があり、頸部には沈線はない。このほかにもブリッジから墳丘にかけて、多数の土器が出土しているようであるが器種等の詳細は不明である。この古墳は、ブリッジを有する円墳⁽⁵¹⁾で、貝化石を含む砂岩を使用した単室の横穴式石室を埋葬施設とし、フラスコ形長頸瓶を出土した古墳であり、他の古墳と比較するのに重要と考えたので紹介した。

佐倉第3工業団地の造成工事に伴う発掘調査でも、終末期の方墳が発見されている。佐倉第3工業団地の古墳群は、中期から終末期にかけて築造された古墳が150基ほど発見されている。その中には、後期の前方後円墳が数基と二重周溝を巡らす円墳とともに、終末期の方墳と考えられる古墳が10数基発見されている。前方後円墳には大型のものではなく、終末期の方墳にも大型の古墳はないが、張り出しを有するものがある。石材を使用した埋葬施設には、貝化石を含む砂岩を使用したものではなく、砂岩を使用した横穴式石室と片岩を使用した箱式石棺がある。これらの様相は公津原古墳群に似ている。この古墳群中の終末期方墳の最大のものは松向作9号墳⁽⁵³⁾である。周溝は、石室が開口する南辺は一重であるが、他は二重に巡っている。埋葬施設は、箱式石棺に羨道部を取り付けたタイプの横穴式石室のようである。

酒々井町墨小盛田古墳⁽⁵⁴⁾は、印旛沼から奥まった高崎川流域に所在する長方形の方墳である。埋葬施設は調査されていないが、墳丘の南裾に片岩を使用した箱式石棺状の横穴式石室があると思われる。埋葬施設前面の周溝から、低い高台が付き肩の張った口縁部に段がない長頸瓶が出土している。また近くには、石棺が出土している方墳の尾上平台1号墳⁽⁵⁵⁾もある。

今迄紹介した以外で、貝化石を含む砂岩を埋葬施設に使用している古墳としては、手賀沼南岸の船戸1号墳⁽⁵⁶⁾等もある。また、離れたところでは小見川町の阿玉台A地点001号墳⁽⁵⁷⁾と芝山小池1号墳⁽⁵⁸⁾でも確認されている。これらの古墳のうち阿玉台A地点001号墳は方墳で、横穴式石室を構築しているようであるが、他は墳形も定かではなく石棺であった可能性もあろう。また、墳形からみて終末期の方墳と考えられるものをあげると村上1号墳⁽⁵⁹⁾・物井古墳群の方墳（御山遺跡047遺構⁽⁶⁰⁾）等もある。

以上がこの地域の終末期の古墳である。前方後円墳からはフラスコ形長頸瓶は出土しているが、高台付長頸瓶は出土していないようであり、高台付長頸瓶も出土する方墳の方が新しいと考えられる。前方後円墳及び円墳が築造されなくなって以降、この地域の終末期古墳は方墳が多かったと思われる。また、古墳時代後期の大型の前方後円墳がないこと、貝化石を含む砂岩が埋葬施設の石材として使用されていること等も本地域の地域性と言える。他に片岩の板石を使用した箱式石棺を墳丘の裾に設置した古墳が多いことも問題となろう。

(2) 印旛沼周辺の地域性

墳形について

この地域の終末期古墳の墳形は、紹介した例からもわかるように方墳が多い。すなわち、前方

後円墳や円墳は、遅くとも7世紀前半には築造を終了したと思われ、先述の方墳はそれらと同時期かそれ以降の古墳と考えられる。方墳以外では、円墳の沖塚古墳、天王・船塚34号墳、前方後円墳の天王・船塚4号墳からフラスコ形長頸瓶が出土しており、これらが方墳と同時期か前段階の古墳と考える。ただ、龍角寺K24号墳⁽⁶¹⁾は前方後円墳で、墳頂部に木棺を直葬しているが、くびれ部に箱式石棺があり墳丘・周溝から肩が若干張る長頸瓶等が出土している。これは前方後円墳の墳丘が、7世紀の中頃にも使用されていることを示しているのかもしれない⁽⁶²⁾。いずれにしても房総半島周辺地域を見てもこれほど方墳が集中している地域はなく、終末期古墳の主体が方墳であることはこの地域の特徴である。また、長方形をした方墳については、埋葬施設が位置することが多い墳丘南側を中心として、北側に長いタイプと東西に長いタイプの2種類がある。現在のところ北総方面と利根川の北岸で確認しており、その分布範囲はいわゆる変則的古墳の分布域と方墳の分布域の重複した地域に限られているようである。

これらの方墳の立地は、龍角寺古墳群・上福田古墳群・公津原古墳群の方墳が、前段階の前方後円墳や円墳の立地と異なり、印旛沼とは反対の利根川の支流根木名川から続く谷に面し、1基または数基ずつ築造されていることは田中氏が既に指摘しているところである⁽⁶³⁾。その中で伝伊都許利命墳墓古墳が、印旛沼に面していることは注意しておきたい。前・中期の古墳は印旛沼に面して立地しているが、終末期の古墳になると根木名川の支谷に面するようになったということは、生産基盤にでも変化が起きたのであろうか、それとも印旛沼より根木名川の方が重要になったということなのであろうか。いずれにしろ、谷の奥の台地上に立地することは、駄ノ塚古墳も同じであり、終末期の古墳の一つの特徴なのかもしれない。

埋葬施設について

方墳の埋葬施設には、横穴式石室・箱式石棺と箱式石棺に羨道部を付けた形態のものがある⁽⁶⁴⁾。石材は、いわゆる砂岩と片岩、それにこの地域の特徴である貝化石を含む砂岩が使用されている。これらの石材と埋葬施設の関係は、①貝化石を含む砂岩を使用した横穴式石室、②貝化石を含む砂岩を使用した箱式石棺、③片岩を使用した箱式石棺、④片岩を使用した箱式石棺に羨道部を付加したような横穴式石室、⑤砂岩を使用した横穴式石室、⑥砂岩を使用した箱式石棺⁽⁶⁵⁾、以上の6通りの組み合わせがある。しかし、一つの埋葬施設に使用される石材のすべてが同じでなく、別種の石材を数個使用している場合もある。墳形との関係は②と⑥の箱式石棺は円墳、①と③と⑤は円墳と方墳、④の特殊な横穴式石室は方墳に多いようであり、おおよその時期もわかる。

貝化石を含む砂岩を利用している埋葬施設には、横穴式石室と箱式石棺がそれぞれある。それは他の地域でも、砂岩による横穴式石室と箱式石棺があるのと同じであろう。このうち横穴式石室を見ると、最南端の沖塚古墳から龍角寺古墳群・印西町の古墳で採用されている。また、箱式石棺と考えられる古墳まで含めると、その地域は利根川北方から手賀沼まで広がることになる。しかし、貝化石を含む砂岩はこの地域のすべての終末期古墳に使用されているわけではない。砂岩や片岩を使用した埋葬施設も存在する⁽⁶⁶⁾。とすると、この石材も或る種の規制のもとで使用され

たのではないかと思われる。その規制とは、最終的には龍角寺岩屋古墳の被葬者のもとで支配され、特定の被葬者にのみ使用が許されたということではなからうか。また、これらの石室は、規模はもちろん、石材の大きさ等も一定の尺度によって構築されているようで、その点からも共通の支配下のもとで構築されたと考える。貝化石を含む砂岩を使用した横穴式石室で、時期的に一番古いと思われる古墳は、沖塚古墳であろう。この古墳からこの石材は、6世紀末ないし7世紀初めから使用されたことが予想できる。なお、この地域で横穴式石室が採用されるのもこの頃からと思われる。また、使用の下限については明確でない。しかし、建築材及び化粧用としては不適格なのかもしれないが、龍角寺では利用されたようすがないことを付け加えておく。

次に、貝化石を含む砂岩の産出地であるが、この石材はいわゆる成田層中の木下貝層が固まった部分から取れるものであり、印旛沼の北岸では木下貝層の露頭をしばしば見ることができ、どこからきりだしたのか限定はできない⁽⁶⁷⁾。ただ、沼の周辺で切り出すことができれば沼や河川を利用して運搬もできたと思われ、この石材の分布はそれを証明していると思われる。他の地域でこの種の石材が多く見られないのは、この石材の産出地がこの付近に限定されるためであろう。

貝化石を含む砂岩を使用した石室の構築方法は、方墳の場合は切り出した砂岩の小口面を石室内にむけて積み上げ、横目地は一直線に通すものの縦目地は通らないように積んであり、側壁は石材を持ち送りして徐々に石室内にせり出すように積み上げられている。あたかも磚積石室のごとき様相を呈している。なかでも上福田岩屋古墳の石室は、四方の壁が持ち送りされて穹窿状を呈していることから朝鮮半島との関係も以前から取沙汰されている⁽⁶⁸⁾。しかし、上宿古墳の石室は沖塚古墳の石室から系譜が辿れそうであり、平面プランからみそ岩屋古墳と上福田13号墳の石室がその後につきそうなこと。また、石室の特徴である床にある間仕切りは、磚積石室では見られないものであり、前方後円墳である芝山町毬塚古墳⁽⁶⁹⁾・我孫子市白山1号墳⁽⁷⁰⁾や高台付長頸瓶・壺鎧等を出土した公津原古墳群瓢塚39号墳等でも見られることから、一概にこれらの石室が磚積石室の系譜とは即断できないと思われる。

片岩を使用した埋葬施設を見ると箱式石棺が圧倒的に多く、この石材の本来の使用法がわかる。片岩を使用した箱式の横穴式石室は龍角寺108号墳・瓢塚41号墳・瓢塚44号墳・松向作9号墳・墨小盛田古墳・御山遺跡047遺構にもある。これらは、常総地方に多く見られるいわゆる変則的⁽⁷¹⁾古墳の埋葬施設の一類形と考えられる。

この地域の横穴式石室は、ほとんどが単室構造であり、複室構造の石室は少ない。瓢塚27・39号墳は、前室と後室の間は床に低い石を置き、側壁もさほど突出するものではない。村上1号墳は、正方形の後室にやや幅の狭い前室が付く。この3基が知られる程度である。しかも、複室の横穴式石室は、貝化石を含む砂岩を使用したものはなく、すべて砂岩の切石によるものである。この地域の横穴式石室には単室構造のものが多いことも、地域性としてあげられる。

2. 方墳と古代寺院

方墳に限定せず、終末期の古墳と古代寺院と考えればよいわけであるが、本地域だけではなく房総半島には方墳が多いので、半島全体の中で方墳と古代寺院について考えてみたい。その前に、前提となる房総半島における方墳の様相からみておく。房総半島では現在のところ、大型の方墳と呼べる古墳が3基知られている。すなわち、本地域を代表する栄町龍角寺岩屋古墳、今回報告の成東町駄ノ塚古墳、それに富津市割見塚古墳である。それらは近接した地域にあるのではなく、離れた地域に所在する。そこで、はじめにこれらの大型方墳が、どのような基盤のもとで築造されたのかを検討してみる。

(1) 房総半島の方墳のグループ分け

はじめに印旛沼周辺であるが、この地域の方墳には先に見たように貝化石を含む砂岩を使用した単室の横穴式石室をもつ方墳がある。しかもそれらは、一見すると磚積石室のような構築方法で、床には間仕切り石をもつ共通点があり、一つのグループと考えてよいと思われる。貝化石を含む砂岩は、印旛沼周辺に横穴式石室が導入された時に、石の少ない北総でその構築材として捜し出された石材であったのではなかろうかと考える。方墳に限ると現在のところ、この石材を使用している古墳は、龍角寺から印西町の範囲までであり、この地域が、直接的に龍角寺岩屋古墳の造営に関わった人々の基盤ではないかと考える。また、公津原古墳群や佐倉第3工業団地内の方墳群等には、貝化石を含む砂岩を使用した横穴式石室はないが、埋葬施設が単室の横穴式石室が多いことを考えると、印旛沼周辺はその意味では同じグループではなかったかと考える。

次に駄ノ塚古墳を検討してみる。この古墳の石室は、複室構造の横穴式石室である。複室構造の横穴式石室が九十九里から養老川一帯に多く分布することは、すでに中村恵次氏によって指摘されている⁽⁷²⁾。今回は紙幅の関係上細かな検討はしないが、その傾向はさらに明らかになってきていると思われる⁽⁷³⁾。この地域では複室構造の横穴式石室は、方墳だけではなく前方後円墳でも採用されており、方墳が現われる以前から構築されていたことがわかる。これら房総半島の中で複室構造の横穴式石室が集中している地域を、一つのグループと考えたい。

最後に、割見塚古墳であるが、この古墳の石室は以前から言われているように決して在地で生れた形態のものではなく、畿内系の石室と考える⁽⁷⁴⁾。他に割見塚古墳に類似した石室をもつ古墳としては、方墳の森山塚古墳等もある。この地域は、前段階の最後の前方後円墳と言われている金鈴塚古墳に代表されるように、他の地域とは違った豪華な副葬品をもつ古墳が築造されていた地域である⁽⁷⁵⁾。また、いまのところ東国では唯一古墳から新羅系の土器を出土した野々間古墳等も所在する⁽⁷⁶⁾。とにかくこの地域は、割見塚古墳だけでなくどこか他の地域と違う畿内的な要素をもつ特殊な地域であり、それが割見塚古墳が築造された基盤ではないかと考えたい⁽⁷⁷⁾。

(2) グループ別方墳群と初期寺院

前述の三基の大型方墳の近くには、房総半島では創建時期が比較的古いと思われる古代寺院が所在する。すなわち龍角寺岩屋古墳の近くには山田寺系の瓦当文様を採用した龍角寺、⁽⁷⁹⁾ 駄ノ塚古墳には紀寺系の瓦当文様を採用した真行寺⁽⁸⁰⁾ 廃寺跡、割見塚古墳の近くには少し離れるが川原寺系の瓦当文様を採用した大寺⁽⁸¹⁾ 廃寺跡がそれぞれ位置している。

まず、龍角寺岩屋古墳と龍角寺の関係についてであるが、この問題に関しては以前からしばしば検討され、龍角寺を龍角寺岩屋古墳の被葬者の氏寺と考える意見がある。⁽⁸²⁾ また安藤氏は、房総半島に多く見られる方墳と山田寺系の瓦当文様を採用した古代寺院を、蘇我氏と結びつけて理解しようとする考えを示している。⁽⁸³⁾ 筆者も基本的にその意見に賛成である。しかし、房総半島のすべての方墳を統括するのが、龍角寺岩屋古墳の被葬者とは考えにくいと思われる。すなわち龍角寺岩屋古墳の勢力基盤は、単室の石室をもつグループであり、直接的には貝化石を含む砂岩を埋葬施設に使用している印旛沼周辺と考えたいことは先に述べたとおりである。また、龍角寺岩屋古墳の被葬者の系譜下で建立されたと思われる龍角寺の山田寺系瓦当文様は、房総半島には多く見られるが、文様を比較するとすべて同じではなく、若干の時間差があったと思われる。すなわち、龍角寺の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦の文様は、グループ内の上宿古墳近くの印西町木下別所⁽⁸⁵⁾ 廃寺で、半島の他の寺院よりも早く採用されたと思われる。しかし、同じ頃には下総町⁽⁸⁶⁾ 龍正院、市原市二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺でも採用されたと思われる。この時点で早くも、龍角寺の勢力は複式横穴式石室のグループの地域である二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺の建立にも影響を持ち始めたようで、その勢力拡大の様子が窺われる。そのうち龍角寺系の⁽⁸⁷⁾ 鏡瓦は、房総半島にさらに広がり、その勢力をさらに伸長させたことを示していると思われる。

次に、駄ノ塚古墳の近くに位置する紀寺系の瓦当文様を採用した、真行寺⁽⁸⁰⁾ 廃寺跡を検討してみたい。今のところ房総半島で大和紀寺系の⁽⁸⁰⁾ 鏡瓦を出土している古代寺院は、真行寺⁽⁸⁰⁾ 廃寺と二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺の二ヶ寺のみである。この二ヶ寺の位置する地域は、複室の横穴式石室が多く分布する地域と一致している。二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺からは龍角寺系の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦も出土している。二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺の建立に際しては、この地域は複式構造の横穴式石室の地域であり、駄ノ塚古墳を盟主とおおぐ地域なので、本来は駄ノ塚古墳の系譜下で建立された真行寺⁽⁸⁰⁾ 廃寺と同じ大和紀寺系の意匠文様の軒先瓦が採用されるべきだったのではなかろうか。しかし、駄ノ塚古墳の次の首長墓と考えられる、7世紀中頃築造の駄ノ塚西古墳の規模を見ると、このグループの勢力は以前ほどではなかったと思われる、そのことが二日市場⁽⁸⁶⁾ 廃寺で本来の紀寺系の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦に、龍角寺系の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦も同時に採用させる要因になっていたのではなかろうかと考える。瓦当文様の広がりがその勢力を表わしているとすれば、紀寺系の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦が二ヶ寺でしか採用されていないこともそれを裏付けているように思える。

最後に、割見塚古墳のある小糸川流域であるが、この地域の最も古い寺院としては木更津市の大寺⁽⁸¹⁾ 廃寺がある。房総半島では大和川原寺系の⁽⁸⁴⁾ 鏡瓦を出土する寺院は、大寺⁽⁸¹⁾ 廃寺だけである。こ

の点については、この地域が以前から畿内と結び付きが強い特殊な地域であったことがその大きな理由であろう。また、大寺廃寺の創建からさほど時間を経ずに、近くに九十九坊廃寺⁽⁸⁸⁾も建立されたと思われるが、この寺院の瓦当文様には川原寺系の系譜のものはなさそうで、この地域では龍角寺に見られるような瓦当文様の分布は見られない。

では、各グループの寺院の瓦当文様の違いは、何を意味しているのであろうか。まず山田寺系瓦当文様は安藤氏が説くように蘇我氏⁽⁸⁹⁾と関係があったのかもしれない。紀寺系の鏡瓦は地方では、山城・近江をはじめとして北陸・東北地方に多く分布しており、⁽⁹⁰⁾そのことが解明の謎を握っているかもしれない⁽⁹¹⁾。川原寺系の瓦当文様は美濃地方に多く見られ、それらは壬申の乱の論功行賞と⁽⁹²⁾考えられている。大寺廃寺の場合も同じ理由とも考えられるが、この地域は以前から畿内との結び付きが強かったことに、主たる理由があるのではないかと考える。

逆に考えると、方墳という墳形は、山田寺系の鏡瓦を採用する蘇我氏だけのものではなく、紀寺系や川原寺系の鏡瓦を採用する豪族でも採用できる墳形であるとも考えられる。

(3) 各グループ分けの問題点

以上のように考えたときに問題がないわけではない。一つには、貝化石を含む砂岩使用古墳が西は手賀沼周辺の船戸1号墳、東は小見川町阿玉台A地区001号墳や芝山町小池1号墳まで広がっており、特に芝山地区にこの石材があることは、複式構造の横穴式石室が多い地域にどのような入り方をしていたのか検討の余地がある。また、逆に印旛沼周辺には複式構造の横穴式石室が2・3確認されており、貝化石を含む砂岩を使用しているグループとの関係も問題である。

しかし、村上1号墳のように石室の長軸方向に長くなる方墳が、小見川町阿玉台の終末期の方墳のなかにも見られること。市原市山倉1号墳の形象埴輪⁽⁹³⁾は、埼玉県鴻巣市のものなどと非常に似ているといわれており、古墳時代の後期にあれほどまで埴輪祭祀が盛んに行なわれた山武地方の影響が、同じ複式構造の横穴式石室を多く採用した養老川流域の古墳には及んでいないこと。常総地方を中心として見られる片岩を使用した箱式石棺が、利根川そして都川周辺まで広く分布していること。以上のようなことからみると、それぞれのグループは、一定の企画にあった古墳だけ造ると限らないようであり、絶えず他の地域とも交流・影響しあっていたのではなかろうかと考えられる。房総半島の各グループ間の交流はもちろん、他の地域との交流もあったことが、複雑な様相を示している要因と思われる。

結 語

今回は、印旛沼周辺の終末期古墳の紹介に主眼を置いたので、論を進めるにしても憶測で進めた嫌いがある。そのなかで、結論としてはこの地域の終末期古墳の特徴は、墳形としては方墳が多いこと。埋葬施設の石材として、貝化石を含む砂岩が使用されている古墳があることを指摘し

た。この石材を使用している横穴式石室は、石材を横置きに使用し側壁を持ち送りで構築する点や床に間仕切りを有するといった共通点がある。なかにはほぼ同一形態の石室もあり、それらの間には何らかの関係があったと思われる。また、その地域は広く見れば利根川流域から手賀沼・印旛沼周辺、狭く見れば印旛沼周辺の一部と考える。

房総半島全体をみても方墳が多く、それらの方墳は石室の特徴から二つのグループと一つの特異な地域に分けることが可能であり、大型の方墳がそれぞれの盟主墳的な存在であろうと推測した。そして、それらの古墳の被葬者の系譜下で、房総半島では初めて古代寺院の建立が行なわれたであろうとも考えた。

しかし、今回は細かい資料の提示をすることもなく、推測のまま論を進め、また解決しなければならぬ問題がいくつかあることも承知しており、これらについては今後とも検討を続けるつもりである。

註

- (1) 甘粕 健「前方後円墳の性格に関する一考察」(『日本考古学の諸問題』 河出書房 昭和39年)
甘粕 健・久保哲三「古墳の終末と寺院」(『関東』『日本の考古学』4 河出書房 昭和41年)
杉山晋作「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」(『国立歴史民俗博物館 研究報告』第6集 第一法規 昭和57年6月)
- (2) 龍角寺古墳群の全体及び古墳の名称については、下記の文献に拠った。なお各々の古墳で報告書等がある場合にはそれらを参考にし、そのつど明記する。
房総風土記の丘『龍角寺古墳群測量調査報告書』(千葉県教育庁文化課 昭和57年6月)
高木博彦「千葉県印旛郡龍角寺古墳群研究小史」(『千葉県立房総風土記の丘年報』2 昭和53年)
- (3) 玉口時雄他『公津原』(千葉県企業庁 昭和50年12月)
藤下昌信・高木博彦「成田市内の古墳」(『成田市史』通史原始古代編 成田市史編さん委員会 昭和55年3月)
- (4) 藤下昌信・高木博彦「成田市内の古墳」(『成田市史』通史原始古代編 成田市史編さん委員会 昭和55年3月)
- (5) 森 耕一「印西町周辺貝化石岩使用古墳について」(『印西町の歴史』第5号 印西町史編さん室 平成元年)
- (6) 栄町龍角寺・印西町木下別所廃寺・下総町龍正院・佐倉市長熊廃寺の4ヶ寺である。
- (7) 滝口 宏「氏寺の建立」(『古代の日本』関東 角川書店 昭和45年6月)
- (8) 安藤鴻基「房総七世紀の一姿相」(『古代探叢』 滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会 昭和55年10月)
- (9) 石材については、以下の用語に統一した。含んでいる砂は少なく大部分が凝結した貝化石からなる石材を、「貝化石を含む砂岩」と呼ぶ。非常に軟質で、稀に貝化石を含むことはあるが、黄土色をした石材を単に「砂岩」と呼ぶ。絹雲母片岩とも呼ばれているもので、砂岩に比べて硬質で板状に剝離する石材を、単に「片岩」と呼ぶ。
- (10) 註(2)に同じ。
- (11) 大塚初重「千葉県岩屋古墳の再検討」(『駿台史学』第37号 駿台史学会 昭和50年9月)
- (12) 龍角寺岩屋古墳の年代については、決定できる要素が少なく、他の古墳から推測するしかない。龍角寺 K108号墳からは長頸瓶が出土しているが、盗難に遭い不明である。長頸瓶を見た人によると、報告書に載せられているものと若干形が違ってもいう。上福田13号墳からは、7世紀後半から8世紀初めにかけて製作されたと思われる土器が出土しているが、甕は明らかに羨道部に置かれたものであり、他の土器も含めてこれらがどこまでこの古墳の築造時期を示しているかについては検討の余地であろう。しかし、他の方墳を見ても、肩の張る長頸瓶が多いようであり、7世紀前葉まで古くすることはできないと思われ、岩屋古墳も同様であろう。

- (13) 中村恵次他「龍角寺57号墳の発掘調査」(『日本考古学協会40年度大会発表要旨』日本考古学協会 昭和40年4月)
- (14) 多宇邦雄・永沼律朗「みそ岩屋古墳の検討」(『古代』65 早稲田大学考古学会 昭年54年3月)
- (15) 石田広美・小林清隆『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(千葉県文化財センター 昭和60年3月)
- (16) 註(4)に同じ。
- (17) 龍角寺古墳群と上福田古墳群については、藤下昌信・高木博彦氏の「成田市内の古墳」(『成田市史』)や田中新史氏の「古墳時代終末期の地域色」で、すでに指摘されているように一群として捉えたほうがよいと思われる。すなわち、二つの地域を見ると、はじめに上福田地区の印旛沼に面する地域や大竹地区に古墳群(大竹古墳群)が形成され、後期になると龍角寺地区に移動し多数の前方後円墳や円墳が築造されたと考える。さらに、終末期の方墳は立地を変えて、印旛沼とは反対の根本名川から続く谷の北側台地上に造られた。このように考えれば、これらの古墳群が一連のものとして理解できると思われる。龍角寺古墳群と上福田古墳群の終末期方墳は、根本名川から続く一つの谷筋から枝分れた谷の最深部北側に位置しており、同じ群としてとらえねばならない。
- (18) 工藤英行「上福田岩屋古墳」(『成田市の文化財』第9輯 成田市教育委員会 昭和55年3月)
- (19) 小松眞一「下総国に於ける或る三・四の石室古墳」(『人類学雑誌』第37巻第4号 東京人類学会 大正12年4月)
- (20) 千葉県文化財センター「上福田13号墳」(『千葉県文化財センター年報』13 平成元年3月)
- (21) 註(5)に同じ。
- (22) 高木博彦「印西町大森上宿古墳」(『ふさ』5・6合併号 ふさの会 昭和49年12月)
- (23) 森 耕一『千葉県印旛郡印西町後庵山古墳発掘調査報告』(後庵山古墳調査団 昭和58年3月)
- (24) 註(5)に同じ。
- (25) 『利根町史』(1)(利根町教育委員会 昭和54年3月)
註(5)に同じ。
- (26) 註(3)に同じ。
- (27) 註(3)に同じ。
- (28) この資料は、田中新史・白井久美子氏とともに表採したものである。
- (29) 玉口時雄他『公津原』(千葉県企業庁 昭和50年12月)
- (30) 註(3)に同じ。
- (31) 註(3)に同じ。
- (32) 工藤英行「伝伊都許利命墳墓」(『成田市の文化財』第9輯 成田市教育委員会 昭和53年3月)
- (33) 註(3)に同じ。
- (34) 註(3)に同じ。
- (35) 註(3)に同じ。
- (36) 註(3)に同じ。
- (37) 註(3)に同じ。
- (38) 註(3)に同じ。
- (39) 註(3)に同じ。
- (40) 註(3)に同じ。
- (41) 註(4)に同じ。
- (42) 註(3)に同じ。
- (43) 註(3)に同じ。
- (44) 註(3)に同じ。
- (45) 註(3)に同じ。
- (46) 註(3)に同じ。
- (47) 註(3)に同じ。
- (48) 註(3)に同じ。
- (49) 杉山晋作他『遺跡 日吉倉』(日吉倉遺跡調査団 昭和50年8月)
- (50) 昭和63年の冬に発掘が行なわれ現在整理中なので、古墳の詳細については八千代市教育委員会の藤氏からご教示を得た。

- (51) ブリッジの石室に近い所に多数の土器があったということは、ブリッジが葬送儀礼のためのものであることがわかる例であり、横穴式石室の羨道部での葬送儀礼の有無とあわせて興味のある事実である。
- (52) 千葉県文化財センターで現在整理中であり、下記の文献を参考にし藤崎茂樹・山口典子氏よりご教示を得た。
石倉亮治他『佐倉市立山遺跡』(千葉県文化財センター 昭和58年3月)
- (53) 註(52)に同じ。
- (54) 木内達彦『酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告書』(印旛考古資料刊行会 昭和62年3月)
- (55) 註(54)に同じ。
- (56) 古宮隆信「千葉県東葛飾郡柏町天神台・風早村船戸古墳群発掘調査概報」(『上代文化』20輯 昭和26年)
- (57) 矢戸三男他『阿玉台北遺跡』(房総資料刊行会 昭和50年10月)
- (58) 小杉秀雄・佐藤俊雄「芝山古墳群小池1号墳」(『古代』21・22合併号 早稲田大学考古学会 昭和31年11月)
- (59) 天野 努他『八千代市村上遺跡群』(房総資料刊行会 昭和50年2月)
- (60) 千葉県文化財センターで現在整理作業が行なわれている。
- (61) 龍角寺古墳群調査会『龍角寺古墳群発掘調査報告書』(千葉県教育委員会 昭和59年3月)
- (62) 龍角寺101号墳も24号墳同様に長い間墳丘が使用されたようであるが、フラスコ形長頸瓶が出土しており、その頃には利用されなくなったようである。
滝口 宏他『千葉県成田市所在龍角寺古墳群101号古墳発掘調査報告書』(千葉県立房総風土記の丘 昭和63年3月)
- (63) 田中新史「古墳時代終末期の地域色」(『古代探叢』Ⅱ 滝口宏編 昭和60年12月)
- (64) 片岩を使用した箱式石棺に羨道部を付加したような横穴式石室については、下記の文献でも紹介されている。
安藤鴻基他「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」(『古代房総史研究』2 古代房総史研究会 昭和58年9月)
地名表の中では、この種の石室を安藤氏の提唱する『箱形横穴式石室』という名称を使用した。
- (65) 杉山晋作氏は、この種の石棺を石棺系石室と呼んでいる。
杉山晋作「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例」(『国立歴史民俗博物館 研究報告』第6集 第一法規 昭和57年)
- (66) 菅谷文則「榛原石考」(『末永先生米寿記念献呈論文集』乾 末永先生米寿記念会 昭和60年6月)
楠元哲夫「大和榛原石棺の系譜」(『同志社大学考古学シリーズ』Ⅱ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 昭和60年3月)
- (67) 森 耕一氏は、いくつかの候補地を上げている。
註(5)に同じ。
- (68) 註(19)に同じ。
- (69) 滝口宏・久地岡榛雄『はにわ』(日本経済新聞社 昭和38年7月)
- (70) 「白山1号墳」(『我孫子古墳群』東京大学考古学研究室 昭和44年3月)
- (71) 主に下記の文献を参考とした。
安藤鴻基「変則的古墳」雑考」(浜名徳永他『小台遺跡発掘調査報告書』小台遺跡調査会 昭和56年3月)
糸川道行「所謂「変則的古墳」に関する基礎的考察」(『研究連絡誌』第4号 千葉県文化財センター 昭和58年3月)
- (72) 中村恵次「房総半島における横穴式石室」(『史館』2 市川ジャーナル社 昭和49年4月)
- (73) 最近の千葉県文化財センターの調査で、千葉東南部地区や土気地区でも類例が増えている。千葉東南部地区については白井久美子氏も下記の文献の中で意見を提示している。
白井久美子「東国後期古墳分析の一視点」(『千葉県文化財センター研究紀要』10 千葉県文化財センター 昭和61年3月)
- (74) 小沢 洋『二間塚遺跡群確認調査報告書2』(富津市教育委員会 昭和60年3月)
- (75) 註(8)に同じ。

- (76) 『森山塚』(國學院大学文学部考古学実習報告 第7集 國學院大学考古学研究室 昭和59年3月)
- (77) 滝口 宏他『上総金鈴塚古墳』(早稲田大学考古学研究室 昭和27年11月)
- (78) 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅焼土器」(『史館』第8号 昭和52年3月 市川ジャーナル社)
石井則孝「富津市上飯野「野々間古墳出土」の出土遺物」(『史館』第10号 昭和53年5月 市川ジャーナル社)
- (79) 滝口 宏(『下総龍角寺調査報告』千葉県教育委員会 昭和47年3月)
- (80) 今泉 潔・小林清隆他『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財団法人千葉県文化財センター 昭和59年3月)
なお、この寺院はのちに『武射郡寺』になったことがわかる寺院である。
谷川章雄他『成東町真行寺廃寺跡』(真行寺廃寺跡調査団 昭和60年12月)
- (81) 安藤鴻基・須田 勉「上総大寺廃寺の古瓦」(『金鈴』20号 早稲田大学考古学研究会 昭和59年3月)
- (82) 註(7)に同じ。
- (83) 註(8)に同じ。
- (84) 滝口 宏他『木下別所廃寺跡第1次発掘調査概報』(千葉県教育委員会 昭和53年3月)
滝口 宏他『木下別所廃寺跡第2次発掘調査概報』(千葉県教育委員会 昭和54年3月)
- (85) 坂詰秀一他『下総・龍正院瓦窯跡群』(立正大学文学部考古学研究室 昭和59年3月)
- (86) 郷堀英司他『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』(千葉県教育委員会 昭和59年3月)
- (87) 龍角寺系鎧瓦については、先に『長熊廃寺跡確認調査報告書』の中で概略を述べたことがある。
永沼律朗『長熊廃寺跡確認調査報告書』(千葉県教育委員会 昭和61年3月)
- (88) 森本和男『九十九坊廃寺跡確認調査報告書』(千葉県教育委員会 昭和60年3月)
- (89) 註(8)に同じ。
- (90) 類例を上げると、石川県 弓波廃寺・保賀廃寺・津波倉廃寺、愛知県 医王寺、鳥取県 齊尾廃寺などがあり、周縁が雷文であることを紀寺系の鎧瓦の特徴とするならば福島県山口瓦窯跡、宮城県一の関遺跡・菜切谷廃寺などもあげることができよう。
- (91) 畿内政権による東国経営等も考えられよう。
- (92) 八賀 晋「地方寺院成立の歴史的背景」(『考古学研究』第77号 考古学研究 昭和48年8月)
- (93) 米田耕之助「山倉1号墳の人物埴輪」(『古代』59・60合併号 早稲田大学考古学会 昭和51年9月)
山倉1号墳の墳丘下からは、常総タイプの甕も出土しているようであり、様相はさらに複雑である。
- (94) 車崎正彦「埴輪の作者」(『早大所沢文化財調査室月報』No.34 早大所沢校地文化財調査室 昭和63年2月)

(千葉県文化財センター)

Tumulus Mounds of the Final Kofun Period Around Inbanuma Marsh

NAGANUMA Ritsuo

This paper aims to clarify various aspects of tumulus mounds of the final period around Inbanuma marsh, in connection with the Danozuka Tumulus in Narutô Town. For this purpose, the author basically focuses upon the description of tumulus mounds of the final period around a marsh, Inbanuma.

As his conclusion, the author points out that there are many tumulus mounds of the final stage in this area which are square shaped.

He points out that the material used for burial facilities in some tumulus mounds was sand stone containing fossil shells. Corridor-style stone chambers which used this type of stone material in square tumulus mound had somethings in common; for example, the stone material was laid broadways, side walls were constructed with corbels, and the floor was partitioned. Tumulus mounds of the period around Inbanuma marsh had in common not only the square shape of the mounds, but also the Corridor-style stone chambers. It seems that there was some relationship between them, and they can be considered as one group. It may be conjectured that the area covered, broadly viewed, from the basin of the Tone River to the areas around Teganuma and Inbanuma marsh; and if viewed narrowly, part of the area around Inbanuma marsh.

In the Bôsô Peninsular as a whole, there are many square tumulus mounds of the final period. They can be divided into two groups, including the group around Inbanuma marsh, and one special area by the distinctive features of the stone chambers; The large square mounds among these tumulus mounds can be considered to have been the chiefs' tumulus mounds. Furthermore, it is supposed that the early ancient temples in Bôsô Peninsular might have been constructed by the chiefs those were buried in these tumulus mounds.